青ヶ島～最終話～

副校長　小林　寿典

前回に引き続き、青ヶ島について掲載します。「青ヶ島の自然」、「青ヶ島の人たち」、「青ヶ島の受験」について、経験したことを掲載します。「いやいや、そんな事はない。」とお思いの方がいるかもしれませんが、ご容赦ください。

～青ヶ島の自然～

八丈島から初めて降り立ち、ヘリコプターを見送りながら轟音が過ぎ去ったときに思ったこと。「何も音がしない」「人がいない」でした。信じられないほどの静けさが印象に残っています。海抜250Mくらいの場所に、ヘリポートや集落があります。大海原が目の前に広がり（海には行けませんが）、経験したことのない急な坂やコンクリート道路が出迎えてくれます。島で一番高い場所に行くと、ほぼ 360 度海が見えます。島全体が火山の火口であり、島の周囲をぐるっと囲むカルデラの中央には、内輪山の「丸山」があり、世界でも珍しい二重カルデラの島です。山頂に大穴・小穴の二つの火口があり、火口原は起伏の多い溶岩に覆われていて、不用意に近寄ると尖った溶岩でけがをします。「丸山」の西側斜面と外輪山大凸部の内壁は広範囲にわたり地熱が高く、所々噴気（有毒ガスは含まれない）が出ていて、はじめてみると爆発するのではないかと驚きます。この噴気口を「ひんぎゃ」といい、ゆで卵や蒸し芋等を誰でも作ることが出来ます。また、海水を利用する「ひんぎゃの塩」という特産物もあります。島でしかみることの出来ない野鳥や夏に信じられないほど異常発生するカナブン等に驚かされます。

～青ヶ島の人たち～

大きく分けると、「①昔から住んでいる人」「②他の地域からきた人」「③今住んでいるが、いずれ内地等に戻る人」に分けられます。本当は、もっと複雑で説明が難しくなります。教員は③になります。住民の方々はとてもやさしく、挨拶すれば必ず返事をしてくれます。1度会ったら、名前がわからなくても声をかけてくれます。しかし、私が赴任していたコロナ禍では、「内地」から来た人は警戒されました。それは当然です。東京は何千人何万人と新型コロナウイルス感染症の患者が出ている中、医療機関も脆弱な中一人でも感染したら大騒ぎどころではありません。

学校だよりに明日葉のことを掲載すると、大量の明日葉を学校に持ってきてくれます。学校は自分たちのものという意識が強く、なんでも協力してくれます。多くの人たちが卒業生で、児童・生徒たちのことをいつも見守ってくれています。しかし、人口がどんどん少なくなっていることも確かで、近年は青ヶ島への留学生によって学校が存続できています。今後、学校が休校や閉校となってしまうことも考えられます。

～青ヶ島の受験～

島の子供たちにとって、『15歳』は特別な意味があります。青ヶ島には高校がありません。近くには東京都立八丈高等学校があります。しかし、八丈島の高校には行かずに、内地や他の地域の高等学校に行く傾向があります。それは、複雑な歴史にあるようですので、調べてみてください。皆さん主に都立高校を受検します。推薦入試は現地にヘリコプターと飛行機を使用して受検をしに行きます。以前は、ウェブ出願ではなかったので、願書を学校に届けます。ヘリコプターや飛行機が飛ばないかもしれないので、いろいろな方法を考え、予約をしておきます。そして、合否が出るまで内地に滞在して、不合格の場合は再度出願を行います。一般入試では、島の学校は教育庁の入試選抜担当の方が直接島に来てくださって受検します。担当の方も、ジェラルミンケースをもって、ヘリコプターでいろいろな島に降りていくと聞きました。いろいろ、受験は大変なのです。

島の子たちは、15歳になると必ず家を出て、寮や一人暮らしをします。そして、受験について目標を明確にもち、そのための高校選びを行い、島に戻ってきたり内地で生活をしたりするための重要な選択を行うのです。受験への不安と家族と離れるとてつもない不安が伴い、そして人生への覚悟をもつ年齢なのです。